NMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNM

会　報

2010年12月15日　No. 9

ニチメン東京社友会

〒107-8655 東京都港区赤坂2－14－7双日㈱内 17F
URL http://nmtkshayukai.hp.infoseek.co.jp/
E-mail menkwa@sojitz.com

NMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNM

【目　　次】

【ページ】

2011年度新年賀詞交歓会のご案内 …… 2

1．2010年度社友会総会・懇親会開催（於如水会館）
　① 会長挨拶 …… 丸山　修作 …… 3
　② 新会長挨拶 …… 河西　良治 …… 4
　③ 来賓御挨拶 …… 双日㈱会長　土橋　昭夫 …… 5
　④ 総会・懇親会報告 …… 塚本　幸雄 …… 6
　⑤ 2009年度事業・収支報告並びに2010年度事業計画・収支予算 …… 9

2．会員動向
　① 新規加入者 …… 11
　② ご長寿お祝い対象者；米寿、白寿 …… 11
　③ 訃　　報 …… 12

3．ニチメン大阪社友会ニュース；2010年度総会・懇親会開催 …… 13

4．OB会、同好会ニュース
　① ニチメン機友会 …… 久澤　克己 …… 15
　② ニチメン・マンドリンクラブ …… 与儀　治 …… 17
　③ いろは句会 …… 宇治田　薫 …… 18
　④ ニチメン東京化工OB会 …… 栗田　久彌 …… 19

5．会員寄稿文
　① 市民運動からボランティアまで …… 平岡　昭三 …… 21
　② 前車の轍をふまざるは …… 松村昭太郎 …… 22
　③ 囲碁交遊抄 …… 大山　弘雄 …… 24
　④ 老人力、華やぐ …… 竹内　可能 …… 27
　⑤ 奈良便り；平城宮跡への散歩 …… 丸尾　嘉重 …… 30
　⑥ 『ボストン茶会事件』色々なParty …… 浜地　道雄 …… 32
　⑦ 映画鑑賞記および書評 …… 渋谷　義 …… 33
　⑧ 昭和36年入社の皆様へ …… 高木　亨一 …… 35
　⑨ 追想；故中野正さん …… 田中　稔昭 …… 37

6．社友会年会費支払のお願い …… 29

7．社友会役員・世話人一覧表並びに連絡先 …… 39

8．双日㈱社友会関係連絡先 …… 39

9．編集後記 …… 40

2011年度新年賀詞交歓会のご案内

恒例の新年賀詞交歓会を、下記要領にて開催いたします。
皆様と一堂に会して初春を寿ぎたいと存じます。皆様のご参加を心よりお待ちしています。

記

開 催 日　：　2011年 1 月 14 日（金曜日）12：00～　（11：30　開場）

会　　場　：　双日株式会社　本社　西館 7 階　大会議室

アクセス　：　赤坂TBSサカス向い、赤坂新国際ビル西館 7 階
東京メトロ千代田線「赤坂駅」下車 5 番出口（5 b）出て直ぐ右側

会　　費　：　無　料

特記事項　：　―軽食およびお飲物を用意いたしております。
―双日㈱首脳部のご参加も予定されています。
―OBのご長寿表彰　；　米寿 7 名、白寿 1 名
―尚、当日会場にて、双日㈱の自社カレンダー、及び大阪社友会の「会報No. 7」を贈呈いたしますが、いずれも数に限りがありますので、先着順とさせていただきます。

双日社内 「社友会担当窓口」　：　双日シェアードサービス　青木　聡弥
03 ― 5520 ― 4088

2010年度社友会総会　会長挨拶

会 長 丸 山 修 作

皆さん、今日は。

梅雨が明けて一週間、まさに猛暑、この炎暑の日に、大変多くの会員の方にお集まり頂きまして、有難うございます。

本日は双日からも土橋会長ほか役員の方にお見え頂いております。土曜日にもかかわらず、本当にありがとうございます。

本日はニチメン東京社友会第五回の総会を迎えることが出来ました。

創設して丸四年、会員の皆さんのご協力、そして双日株式会社の絶大なるご支援のお陰で、順調に推移して参りました。

一方、大阪の社友会も東京に遅れること一年で発足して、順調に発展をしております。

昨年の総会には、夫々の会長が総会に出席させて頂き、ご挨拶をさせて頂いており、今年も大阪の田淵会長がお見えの予定でしたが、万止むを得ぬ用件で相叶わず。しかし、順調に発展しておることは大変嬉しいことだと思います。

東阪の社友会の交流が一層活発化して、いずれの日か東阪社友会の一本化の道を模索する日が近く来ることを期待しております。

さて、企業を取り巻く環境は極めて厳しく、現在会社経営に当たっておられる土橋会長、加瀬社長ほか双日の役員の方のご苦心は並大抵のものではあるまいと、お察し申し上げております。先日、社友会の河西良治副会長と一緒に加瀬社長を訪問致しました。大変お元気で将来の成長分野である新エネルギー、環境、食料、といった分野に積極的な投融資を行なっており、その成果もやがて見えて来る、と将来に対して大変明るい抱負を力強く述べておられました。双日役職員一同の更なるご活躍を祈念して止みません。

最後になりますが、過去二年半会長の職に就いておりましたが、本日の総会を以て、後程お諮り致しますが、会長職を辞します。後事を河西良治さんに託させて頂きたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

わずか二年半の短い期間でありましたが、一応大過なく過ごさせていただきました。

会員の皆さんの友情を多とし、双日株式会社のご支援に深く感謝したいと思います。

同時に、今日まで社友会をこれほど盛りたてて頂いたのは、倉又代表を初めとする社友会の世話人の、時に寝食を忘れた社友会へのご尽力、ご協力、まさに頭の下がる思いでございます。

世話人の皆さん、どうもありがとう。

ひとつ今後とも社友会のためにご尽力いただければ幸いです。

本日お集まりの皆さんのご健康と、東西を含めたニチメン社友会の一層の発展、そして　双日株式会社の更なる飛躍を祈念して止みません。

以上をもちまして、挨拶に代えさせて頂きます。

どうもありがとうございました。

新　会　長　挨　拶

前副会長　河　西　良　治

ただいま皆様のご承認を頂きました河西良治でございます。

まず、丸山会長、会長職二年半余の長期に亘って、ご指導、ご尽力頂きまして、本当に ありがとうございました。心より御礼申し上げます。

私は、あと七か月位で満八十に達しますが、何か最近心身共にガタガタして参りまして、これ人間も動物の一種だから仕方がないと思うのでございますけれども、最後の力を振り絞って、任務を全う致したいと思いますので、どうぞ皆様よろしくお願い致したいと思います。

本日は、これから楽しい行事が続きますので、ごく短く申し上げるように致したいと思います。

今年は、例のフットボールのワールドカップで世界中が大変賑わいました。そして優勝したスペインのいわゆるベスト・イレヴン・メンバーズ。我が社友会にもこれに相応しい存在がございまして、監事さん二人を含めてthe very best fifteen membersの世話人の皆さん、倉又さんを中心に、六年も、いや恐らく構想の段階からでしょうから、六年以上も、昼夜を分かたず、この会の運営に尽力致して頂いておりまして、感謝の極み、と私は思っております。

仕事の内容は、ここで細かく申し上げるまでもありませんが、皆様ご承知のように、会報、会員の動静、ホームページのシステムの立ち上げ・運用、それから慶弔事の取扱い、そのほか、双日様から無償提供頂いている事務所の管理・運営、予算決算、これらを全て自主運営でやっております。

そして今日も一例でございますけれども、年に二回の全員参加型の、楽しい懇親会、そのオーガニゼーションなどなど、であります。

ついこの頃も、海外在住の方を含めましてトータルで八人の新入会員を得ることが出来まして、誠に意を強うしております。要は、ニチメンで同じ釜の飯を食った、楽しいことも辛いこともあったけれども、その我々が一堂に会して杯を重ねながら楽しむ、というのが全てだと私は思っておりますので、本日ご来席頂いた皆様にも、これを機会にlook aroundして頂いて、自分の身の回りにニチメンのOBでありながら未だに会員になっておられない方がおられたら、何とか一人でも余計に入ってもらうようにご尽力頂くように是非お願い致したいと思います。

先ほど土橋会長のお話を頂きましたが、本当に我々の会にとりまして、物心共にご支援、ご援助頂いておりますことに対しまして、改めて厚く御礼申し上げます。先程の会長のお話で、“Shine Twenty Eleven”ですか、その数字もご披露下さったように中々心強いものがございます。

その過程に於いて、もし我が社友会に対する援助金も、若干でも増額して頂けるような チャンスがあれば誠に幸いだと思いますので、ひとつ宜しくお考え頂ければ、と存じます。

土橋会長、加瀬社長、それからご来席の役員の皆様、そして社員の皆様の一層のご活躍と双日の無限の大発展を祈念致しまして、私の挨拶とさせて頂きます。ありがとうございました。

来　賓　御　挨　拶

双日㈱会長　土　橋　昭　夫

皆様こんにちは、双日の土橋でございます。

梅雨前線が停滞しまして、西日本は大変な豪雨に見舞われ水害がありましたが、梅雨明け一転、今度は日本列島が猛暑に襲われております。

本日は、35度近い大変暑い中、160名近いお元気な皆様方がお集まりになりニチメン東京社友会が開催されました事、お慶び申し上げます。

また、本日は特別ゲストと致しまして、下條先生がお見えになるということで、私も30数年振りにお会い出来ると大変楽しみにしておりました。

本日は大変暑い中でもあり、一刻も早くのどを潤して頂いたほうが良いと思いますので、簡単に会社の現状をお話しさせて頂きます。

去る6月22日に双日の第7回定時株主総会が行われました。今年もまた1,300名を超える大勢の株主様がお見えになり、10名の株主様から、17のご質問やご意見を頂きました。この中で、お叱りやご忠告、或いは厳しいご指摘、一方では励ましと、多くの発言がございました。私どもは、このようなご意見に真摯に耳を傾け、しっかりと経営に当たっていかなければならない、という思いを新ためて強くした次第です。

先期は2度にわたる業績見通しの下方修正を行い、中間配当は行いましたが、期末配当は内部留保を優先させ、見送りとさせて頂きました。連結の経常利益は137億円に留まり、不甲斐無い成績に終わってしまったことをお詫び申し上げます。

今期のスタートである第一クオーターの決算は、来週発表になりますが、ほぼ予定通りであり、スムーズなスタートが出来たと思っています。

一昨年秋のリーマン・ショック以降、世界各国が共調して経済対策を打ち出し、その効果もあり世界経済も順調に回復してきたところでありますが、ここにきまして、やや減速、或いは失速の兆候が見えてきたのも事実でございます。

2～3日前にアメリカFRBのバーナンキ議長が議会で、『アメリカ経済は異例な不透明さにある』、また『非常に不確かである』、と述べております。一方、ヨーロッパはご存知のように、ギリシャの破綻によって金融不安が起こり、不安定な経済状況にあります。そして日本はといいますと、先日の参議院選挙で民主党が大敗し、衆・参のねじれが生じました。雇用状況も良くない、失業率も依然として高く、円高、株安と企業を取り巻く環境は大変厳しい状況であります。

こうなりますと、やはり新興国が頼りとなり、とりわけ中国の動向が気になるところであります。私も7月4日から1週間、中国を訪問し、内陸部の状況を見てまいりました。地方政府の方々のお話しをお聞きしてきましたが、最近は中国でさえも、若干慎重な物言いになっており、確かにデータを見ましても、減速の兆候が見えております。しかしながら、中国は個人消費が旺盛であり、マネーサプライも、伸びが落ちて来ているとはいえ依然として高い水準にあり、むしろ過熱気味な経済を政策的に抑えているように感じました。やはり、中国をはじめとするインド、ブラジル等の新興国が世界経済を牽引するという、パラダイム・シフトが起こっております。

ある意味、変化は商社にとってチャンスと思っております。変化に融通無碍に対応できるのが商社の特徴でもあるわけです。どこに風が吹いているのか、どこに水が流れているのか、時流をしっかりと捉えまして、今期の目標である連結の経常利益260億円を是が非でも達成し、来期の560億円につなげていきたいと思います。そして継続して安定的な配当を行うことにより、株価の上昇も図られると確信しております。

今後も役職員一同、一丸となり業務に邁進して参りますので、皆様方に置かれましては、引き続きご支援のほど宜しくお願い申し上げます。 最後に、お集まりの皆様方の御健勝を祈念致しまして、私の挨拶とさせて頂きます。

第五回ニチメン東京社友会総会・懇親会開催報告

塚　本　幸　雄

長い雨が続いた後、猛暑の嚆矢か気温35度にもなる7月24日土曜日に第五回「総会・懇親会」が例年通り「如水会館」にて開催されました。当時の政情は鳩山前総理と民主党小沢前幹事長の確執を経て誕生した管政権が発足して一カ月余りのことでした

会場には受付開始から多数の社友が参集し話の輪が出来､久闊を述べ合う内に最終的には157名の出席者となり、定刻の12時過ぎから倉又世話人代表の司会で総会が始まり、冒頭ニチメン社友の今年の物故者37名に対し全員で黙祷が捧げられました。

総会議事の前に丸山修作会長から挨拶があり、過去4回の発展の経緯と世話人への労いの言葉があり、続いて総会に移ってからは2009年度の事業報告・会計監査報告さらに新年度の事業計画・予算案などが承認されました。

引き続き任期満了に伴う役員改選案が承認され、河西良治新会長が挨拶の中で今後への抱負を述べられ又双日土橋会長からも収益改善への力強い見通しが述べられました。

懇親会に移り司会は浜口世話人により進められ、ニチメンOBの京野勉さん寄贈の美酒「春爛漫」の菰被りの鏡開きから始まって、立古健策さんの乾杯の音頭で開宴となりました。

本田務さんが率いるバンドが奏でるハワイアンが続く中、ニチメンの保険医をされていた下條先生が特別参加されてスピーチを頂きましたが、お世話になった人達による挨拶が絶えませんでした。

さらに宴は進み、丸山前会長の独唱「マイウエイ」で最高潮に達しましたが、所定の時間があっという間に過ぎて、去り難きを惜しむ間に、鉄鋼輸出出身の高野泰雄さんの中締めとなり、お互いに来年の再会を約して散会となった次第です。

最後になりましたが、受付や運営にあたりご協力いただきました枡山さん、垣田、木津、滑川、今井、増川の皆さん方には大変お世話になりました。有難うございました。

以　上

2010年7月24日(土)開催総会・懇親会出席者一覧表

［敬称略）

［社友会会員］

あ
青木聡弥 (*)
2 朝倉重道
3 浅子豊治
4 東信子
5 甘利廣
6 荒木武雄
7 新崎盛晨
8 幾島清
9 池田格
10 石川勝美
11 石川博保
12 石原啓資
13 泉伸夫
14 市川元久
15 今村隆夫
16 入野英次
17 岩下恒則
18 岩橋宣之
19 植木弘政
20 上杉将司
21 内田鏆一
22 大久保海生
23 大崎隆三
24 大塚静子
25 大塚健夫
26 大西勇
27 大野悦良
28 大野久生
29 大羽陽一郎
30 大平栗雄
31 大森啓作
32 大山弘雄
33 岡田茂
34 沖田隆彦
35 沖本達也
36 小野寛

か
海田康忠
38 垣田佐代子 (*)
39 河西良治
40 数森正彦
41 勝田泰司
42 金井湧二
43 金沢英雄
44 鏑木順治郎
45 上條達雄
46 川西勲
47 川畑正巳
48 川本寿彦
49 菊池省三
50 岸川榮一
51 木津奈緒子 (*)
52 倉又則夫
53 倉持次雄
54 栗田久彌
55 五島慎二

さ
斉藤至弘
57 坂本晤
58 桜井潤一
59 佐々木俊郎
60 佐藤悦三
61 佐藤智
62 佐藤三朗
63 佐藤鐵雄
64 佐藤統次
65 佐藤眞澄
66 三分一克美
67 篠塚美郷
68 柴田実
69 渋谷義
70 清水武人
71 白石哲也
72 新藤喜与次
73 菅沼利太郎
74 杉浦好治
75 杉浦幸雄
76 杉本佳久
77 祐定郁夫
78 鈴木淳一
79 須藤忠昭
80 曽我宏司

た
大工原正徳
82 高木亨一
83 高瀬允宏
84 高瀬善男
85 高田秀子
86 高野泰雄
87 田尻眞啓
88 田中孝平
89 田中偉堯
90 谷昌興
91 田畑実
92 田村順子
93 塚本幸雄
94 津田賢一郎
95 利根川慎治
96 豊木啓喜
97 豊間根政行

な
永井清光
99 中川十郎
100 並木正
101 滑川和子 (*)
102 南部捷郎
103 西村照男
104 庭野松三
105 野本定男

は
芳賀信明
107 橋口喜郎
108 羽島昭一
109 橋本春彦
110 長谷川洋
111 花澤和郎
112 埴生栄勇
113 浜口信恭
114 林正弘
115 林義人
116 久澤克己
117 平石豊
118 廣岡幹雄
119 廣田雄太郎
120 深尾孝
121 古家章
122 星野則和
123 堀口和実
124 本田務
125 本間登志雄

ま
牧洋生
127 桝山俊次 (*)
128 松尾憲一
129 松本忠夫
130 松本靖史
131 丸山修作
132 水野英幸
133 溝江博三
134 三原均
135 村井靖武
136 村松寳夫
137 望月昌徳

や
矢島孝
139 山岸正雄
140 山口一光
141 山邑陽一
142 湯浅荘三郎
143 与儀治
144 吉木健
145 吉本邦晴

ら
立古健策

わ
渡利陽

（合計　147名）

［双日役員他］
148 土橋昭夫
149 鈴木譲治
150 花井正志
151 新藤孝
152 杉田俊夫
153 柏井八栄子

［特別ゲスト他］
154 下條ゑみ
155 丸山嘉子

［協力・支援者］
156 今井恵子
157 増川恵子
（小計　11名）

（出席者合計157名）

(註)
(＊)は受付支援等で総会の運営にご協力頂いた会員。

第五回ニチメン東京社友会総会
懇親会風景

2009年度事業報告及び収支報告

（期間：2009年07月01日～2010年06月30日）

ニチメン東京社友会

Ⅰ．事業報告

	実績（千円）	予算（千円）
第４回総会・懇親会開催（2009年７月13日） １８３名出席	７９３	７４０
会報・会員名簿発行 会報２回	７２６	８５０
ホームページの運用 保守管理外注	２４０	３００
第３回新年会開催（２０１０年０１月１８日） １４５名出席	５２４	５９０
慶弔行事 長寿者表彰７名	３４２	３５０

Ⅱ．収支報告

A）収入の部	実績（千円）	予算（千円）
１．会　　費	1,８１５	1,８００
２．双日支援金	1,８００	1,８００
３．寄　　付	６	０
４．そ　の　他	３３	１００
	3,６５４	3,７００

B）支出の部		
１．総会・懇親会開催費用	７９３	７４０
２．新年会開催費用	５２４	５９０
３．会報・会員名簿の発行	７２６	８５０
４．ホームページの改良・運用	２４０	３００
５．会 員 慶 弔	３４２	３５０
６．世話人会運営費用	２５２	３５０
７．事務所運営費用	６９６	７５０
８．予　備　費	４７	１７０
	3,６２０	4,１００

C）差引当期繰越金	３４	-４０
D）前期繰越金	2,０６０	2,０６０
E）当期末繰越金	2,０９４	1,６６０

補足説明：（１）上記は飽くまでも当期末の予測数値であり、若干変わる可能性があります。
（２）当初予算では赤字予算を組んでおりましたが、各事業項目で、即ち、新年会・会費発行・世話人運営費用等で予算を下回ったことによります。

2010年度事業計画及び収支予算

（期間：2010年07月01日～2011年06月30日）

ニチメン東京社友会

Ⅰ．事業計画

	予算（千円）	前期実績（千円）
第５回総会・懇親会開催	８００	７９３
ハワイアンバンド特別出演		
会報・会員名簿発行	９３０	７２６
会報２回		
ホームページの維持・運用	３００	２４０
第４回新年会開催	５２０	５２４
出席者に双日カレンダー贈呈		
慶弔行事	３５０	３４２
長寿者表彰予定者７名		

Ⅱ．収支予算

A）収入の部	当期予算案（千円）	前期実績（千円）
１．会　　費	1,８００	1,８１５
２．双日支援金	1,８００	1,８００
３．寄　　付	０	６
４．そ　の　他	１００	３３
	3,７００	3,６５４

B）支出の部		
１．総会・懇親会開催費用	８００	７９３
２．新年会開催費用	５２０	５２４
３．会報・会員名簿の発行	９３０	７２６
４．ホームページの維持・運用	３００	２４０
５．会 員 慶 弔	３５０	３４２
６．世話人会運営費用	３００	２５２
７．事務所運営費用	７５０	６９６
８．予　備　費	１００	４７
	4,０５０	3,６２０

C）差引当期繰越金	－４３０	３４
D）前 期 繰 越 金	2,０９４	2,０６０
E）当期末繰越金	1,６６４	2,０９４

訃　　報

（2010年４月１日～12月６日）＊印は非会員

ニチメン東京社友会

氏　　名	出身部門	ご逝去年月日	享　年
富　岡　　滋	機　械	２０１０．　５．１２	７５
荒　木　信　夫（＊）	機　械	２０１０．　６．　８	７５
神　谷　　勤	機　械	２０１０．　８．１２	７５
田　畑　　実	化　工	２０１０．　８．２２	７６
廣　田　孝　夫	財　経	２０１０．　８．２９	７６
中　井　　浩	機　械	２０１０．　９．２７	８５
野　中　忠　雄（※）	化　工	２０１０．１２．　６	７４
［追記］			
樋　口　秀　雄	総　務	２０１０．　１．　４	８８

ニチメン大阪社友会

氏　　名	出身部門	ご逝去年月日	享　年
青　木　高　之	繊　維	２０１０．　４．　６	７８
村　上　久　二	繊　維	２０１０．　４.２５	７２
河　島　俊　彦（＊）	機　械	２０１０．　５.１３	７３
岡　田　光　夫	食　糧	２０１０．　５.１８	８３
中　野　　正	元役員	２０１０．　８．　１	７７
小　倉　成　夫（＊）	経　理	２０１０．　８．　－	７６
市　居　徳　蔵	通　信	２０１０．　－．　－	８９
畠　中　秀　子（＊）	財　務	２０１０.１０.３１	８５

ご冥福を、お祈りいたします。合掌

nmosnmos　ニチメン大阪社友会ニュース　nmosnmos

＊＊＊　第四回総会・懇親会開催　＊＊＊

編集部：長谷川　洋

2010年9月9日、大阪「太閤園」にて開催。 昭和30年代には「ニチメン秋の園遊会」が催された懐かしい場所です。 若かりし日の藤田まことが出し物のMCをやったことなど思い出します。

さて『総会』は、11：30　白川清朗世話人代表の司会により始まる。
まず物故者への黙祷、続いて会員動静報告、役員紹介があり、田淵弘通会長の挨拶となる。
その後、議事が上程され滞りなく進行し承認された。

引き続き『懇親会』は、林　靖副会長の司会で始まり、長老、池島幹生さんの乾杯の儀となる。 この日の出席者158名、遠く東京より、さらに静岡、愛媛、福井、徳島，岐阜、和歌山からも参加者が居られた。

歓談に華が咲く中に、14：00　木村幸史副会長の一本締めで中締めとし、お開きを迎えた。

大阪より送られてきたCD写真で、ご出席の田中義巳さん、早瀬三郎さん、澤田太郎さん、辻井準一さんの御元気なお姿をお見受けしました。
その他、見覚えのある多くの皆様のお顔、お顔が次々に写っていました。
これ昔紅顔のイケメンいま何処のような方、鶴髪のみだれて糸の如しの方、半世紀に近い時の流れを感じさせました。 皆様のご健勝を御祈りしております。

ニチメン大阪社友会
第四回総会・懇親会風景

第５回ニチメン機友会

久　澤　克　己

今年で５回目を迎えた吾らが機械友の会は、気温20度、秋晴れの10月23日（土）、東京駅徒歩８分の八重洲富士屋ホテルに、懐かしい仲間72名が集まって盛大に開催された。

社窓を離れて何年づつか、今夏の記録的長丁場の猛暑も乗り越えて元気に集まった日焼けした顔、顔!「あの頃より元気そうやないか!」との声が、あちこちで聴かれる。

司会進行は星加　恭さんの朗らかな声で、正午開宴。

冒頭、この１年間に鬼籍に入られた先輩物故者（岩田　昭二さん、神谷　勤　さん、富岡　滋さん、河島　俊彦さん、中井　浩さん、臼井慎二さん）を偲んで御冥福を祈り、全員黙祷を捧げる。

続いて、当会会長　上条　達雄さんの、ちょっと改まった開会挨拶に、想定を上回る出席に謝辞を加えられ、次に社友会前会長丸山　修作さんのいつもの笑顔で「わさび」を利かせたスピーチ付き御発声による一同乾杯で、一気に宴は盛りあがった。今では上条さんも吾が機械部門の最長老格のお一人だが、終戦後間もない入社当時の若かりしお二人の、インドネシア曼荼羅の苦楽を分ち合ったエピソードなど何度聞いても微笑ましい。

その間、BGMの演奏、歌の伴奏、を昨年に続き買って出てくれたのは通称･与儀バンド、与儀　治さんをリーダーとする、ニチメン・マンドリン・クラブが感謝の拍手のうちに紹介された。

暫く歓談の後、朝倉　重道さんによる近況報告も嬉しく楽しく、続いては上条会長のマンドリン伴奏に乗せた「リラの花咲く港町」の独唱、若々しい美声は、とても米寿を迎えんという方とは思えなかった。続いては、毎年恒例となった、石澤　謙一さん作詞・指揮による『ボケない小唄』を全員「ボケまいぞ」と大声張り上げ、にぎやかに時は経過した。

しばし、更なる歓談続行中も時間は容赦なく押して来たので、今回の当番幹事（建機車輌部）を代表して、小生久澤　克己が中締めに立ち、一つだけエピソードとして、東京都心にあるカンボジア料理店に入っていったら、奥から飛び出してきた老店主に『おほッ！ニチメン!』と抱きつかれ同行の立古　健策さんともども吃驚したが、古きよき時代のプノンペン･ニチメンの華僑系お顧客だった。いつまでも懐かしい「ニチメン」の名が、あちこちで聞けることを願っていますと述べた後、次回当番幹事（プラント本部）代表の水庫　博夫さんを紹介し、「次回も盛大にやりましょう」との爽やかな挨拶を頂戴。その直後、小生の「関東の一本締め」に満場のご唱和を給われ、星加名司会の閉会宣言で第５回は無事、目出度くお開きとなりました。

上述マンドリン・クラブの方々とボランティアで受付業務をお手伝い頂いた、小堀　裕子さん、斉藤　純子さん、増川　恵子さん、には、この場を借りて、更ためてお礼を申し上げます。

第５回ニチメン機友会風景

ニチメンマンドリンクラブ（NMC）について

与　儀　　治

ニチメンマンドリンクラブは八重洲富士屋ホテルで毎年10月開催される機友会に昨年から宴会のBGMバンドとして出演させて頂いておりますがOBの方々で我々クラブの存在を御存じない方がたくさんおられるのでNMCの生い立ち等本誌面をお借りして紹介させて頂きます。

1962年当時機械部におられた井端和夫さんが終業後マンドリンとギターの愛好者を10名ほど集めて近三ビルの食堂で合奏を楽しんだのが始まりです。

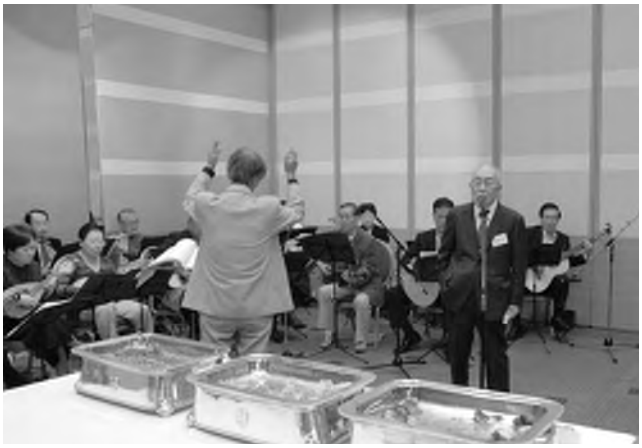
当初はマンドリンとギターの合奏だけでしたが1963年当時東邦樹脂工業に在籍していた明大マンドリンクラブコンサートマスターの経験のある野田弘氏（ソ連貿易でご活躍された野田秀一氏の御子息）の指導を受けることとなりマンドリン、ギター、ベース、管楽器、アコーデオン、打楽器を含めたマンドリンオーケストラとして再出発致しました。各パートのプレーヤーを集めたりマンドリンメンバーの演奏技術の向上を計るなど努力を重ね1965年メンバー待望の第一回演奏会をブリジストンホールで開催することが出来ました。その時は佐藤秀隆さんが歌手として出演されました。第四回定演からは観客定員700名の東京都勤労福祉会館大ホールに場所を移し皆さんのご支持を受けながら1973年の第九回定演まで演奏活動を行うことができました。 その間療養所、老人ホームでの慰問演奏、結婚式でのBGM演奏など幅広く活動をしてまいりましたが諸事情により1974年休部致しました。

この9年間に演奏した曲はセヴィリアの理髪師、ウイーンの森の物語等のクラシック、春の調べ等の日本古謡、木曽節等の日本民謡ポルシカポーレ等のロシヤ民謡、ポール・モーリアスタイルの軽音楽、映画音楽、闘牛士のマンボ等のラテン音楽等レパートリーは200曲を超えます。また昭和通りお向いさんの清水建設さんや味の素さんの合唱団とコラボをしたのも楽しい思い出です。

その後30年ほどたってちょっと楽器に触りたいと言うメンバーの声で楽器持参の旅行が毎年始まりました。

現在はニチメン出身者以外にも参加を呼び掛けていてメンバーも17名程度になり年1回の合宿と毎月練習兼飲み会をやりながら小学唱歌、日本古謡、昭和歌謡、シャンソン、ラテンなどの曲をアンサンブルで楽しんでいます。

特に演奏会をやるなどの大それた考えは有りませんが音楽を楽しむ場としてやっておりますので興味のある方いらっしゃれば是非ご参加ください。



俳句の会「いろは句会」

宇治田　　薫

Ⅰ．句会のその後：

社友会会報第七号に次いで、今回一年振り四度目の掲載を嬉しく思っている。

前回同号で近年会員の健康不安説をお伝えしたが、図らずも本年一月十二日、薬石効なく残念ながら吉村文夫会員が他界された。謹んでご冥福をお祈り致します。合掌。ご不幸に際し、福島有恒会員の提案により会員一同で追悼句集を作成し、仏前にお供えした。

去る十月第二五二回例句会で、発足来二十二年十カ月を迎えたが従来、太田昭主宰におんぶに抱っこで運営されて来た句会のあり方の反省から、本年は俳人結社の句会で行われている方法を参考に、投句の一覧表作成等は各会員の協力により、主宰を補佐する運営方法に変更・採用する事とした。そして、会場も福島有恒会員の紹介による日比谷の「東京六甲クラブ（神戸大学同窓会館）」に変更した。

例により本年中に発表された作品の中から、各会員二句宛下記にご披露する事に致します。

Ⅰ．会員の発表句（アイウエオ順）：

汐の色濃くなって来し秋の海	（あ　き　ら）
大寺に駅鳩も来る秋彼岸	〃
白魚の命まるごと透けてをり	（宇治田　薫）
芹の水透けて真青に流れゆき	〃
抱かれてよく笑ふ子や天瓜粉	（太田　琢也）
熟し柿顔中で喰む童かな	〃
何事も後廻しにす大暑かな	（久保田悦子）
客一人稲穂の径をバスの行く	〃
新緑や朝練の子の声高し	（三枝　一希）
秋蝉や薬師の庭の古着市	〃
海風の糶場の梁や燕の巣	（笹原　　弘）
一湾の夜空押し上げ大花火	〃
彩りを重ねて山の芽吹きかな	（佐藤　秀隆）
大花火東京湾を跨ぎたる	〃
梅雨明けや木々かいくぐり海の風	（下川　泰子）
そのまゝでそのまゝでよし冷奴	〃
突き出せる昔ながらの心太	（須藤　忠昭）
障子貼り自賛の妻の襷掛け	〃
新緑や色はひと日と留まらず	（塚本　幸雄）
いつしかに我も踊りの輪の中に	〃
山葵田に空の色あり水光る	（福島　有恒）
水遣りを夕立に頼み旅に出る	〃
幼子の白きくびれや汗みどろ	（藤野　徳子）
朝鳴き夕べにも鳴く秋の蝉	〃
青田波鷺か農夫か動く白	（若月　義和）
片蔭の途切るる道を検診日	〃

以　上

ニチメン東京化工OB会
＜第20回懇親会＞

栗　田　久　彌

ニチメン東京化工OB会が恒例により10月第3金曜日（15日）18時より、昨年に引き続き日本橋交差点脇にある 「レストラン東洋」で、開催されました。
平成2年（1990）発足以来中断することなく続けられている当会も本年で第20回を数え、漸くにして成人に達しました。

本年の参加者数は双日現役　及び　他社への転職組を含め総勢43名と昨年比1名減では有りましたが、大方の方々は開宴予定時間の20分前頃には既に参集され、旧交を温める人垣があちこちに出来上がり開会前から熱気が漂う有様でした。

島崎会長の挨拶に引き続いて、業務超多忙のなかをスケデュール調整されて参加された双日専務執行役員の鈴木譲治さんからは化学品・機能素材部門の、双日インフィニティ社長の石原啓資さんからは同社の、厳しい経済環境の最中にありながらも着実に歩を進めている現況説明と今後に対する明るい抱負を語って頂き、参加者一同大いに勇気付けられまた満足しました。

懇親会は従来になく華やかな雰囲気のなか、時の経つことも忘れ和気藹々歓談満開の状態が延々と続き、宴会終了予定時間の20時になっても会場は依然として熱気に包まれ其処此処の懇親の輪は崩れそうもない状態でしたので、レストラン側に時間の延長を伝え時間を延長しましたが、その後遂にレストラン側から閉会の催促が入るに及び時間延長に終止符を打たざるを得ない状態となりました。

やむなく閉会と来年度の開催日は10月21日（金）である事を告げた上で、小野寛さんの音頭で中締めを行い本年度の懇親会は無事閉会致しました。
省みると参加人数は年々減少の方向にあるものの、近年に無い盛り上がりのあった今年の懇親会でした。

参加者名（アイウエオ順、敬称略）

青木政和	阿久津桂子	浅井正彦	浅子豊治	足立　宏
池田　格	石原啓資	岩上敦司	植木弘政	大野久生
大村健太郎	小平愛一郎	小野　寛	勝田泰司	河本吉人
清田郁夫	栗田久彌	篠塚美郷	島崎京一	鈴木譲治
須藤忠昭	関口比佐志	竹内可能	竹内雄一	田所忠彦
玉置宜宏	栃木良雄	中尾弘久	滑川和子	西村照男
浜田早苗	林　悟	日原東洋	本間登志雄	牧　洋生
松島　寛	水野英幸	箕作武彦	山邑陽一	吉海秀造
吉木　健	吉田孝生	和田順一		

第20回　ニチメン東京化工OB会　懇親会風景

[幹事]
合成樹脂関係：吉木　　健
化 学 品 関 係：栗田　久彌

市民運動からボランティアまで

平　岡　昭　三

平岡昭三です。最近眼を悪くして歩行難渋のため、長らく総会も欠席で失礼しております。境界型糖尿病が原因なのか左眼が白内障、緑内障、網膜閉鎖症を併発し、完全に片眼になってしまいました。之だと、物皆全て遠近感がなくなり、ゴルフも麻雀もやれなくなりました。でも読書、テレビ、散歩、野菜作りは大丈夫です。

それから、道州制改革の政治の市民運動は何とか続けております。

思えば定年以来23年間いろいろやって参りました。最初に嵌ったのは大前研一氏（上の写真）の道州制改革論でした。この国を改革するには之しかないと信じ、平成維新の会を一緒に立上げ、その後、道州制を標榜する民主党に入党しました。今も平成維新の会の流れを汲む首都圏中心の市民運動の会の「生活者主権の会」で「道州制実現推進委員会」を組織し、又横浜の「かながわ市民フォーラム」に参加しております。

民主党では小沢一郎氏は、中央政府と末端の基礎自治体さえあれば中間の道州制は屋上屋になるから、余り賛成ではないと称え、為に党内では道州制実現論が若干トーンダウンしております。私どもは、それではならじと党にハッパをかけています。中央省庁の大半を残す限り、官僚の抵抗は納まらず、政治改革は百年河清であります。

新任の片山総務相は、命をかけて地域主権改革をやると言っておりますので、之に期待しております。恐らくニチメンOBで民主党員は私一人でありましょう。

どなたか一人でも入党して頂けると嬉しいのですが。（笑）

それから同僚の松村昭太郎君とは、一緒に日本中あまねくワゴン車の中で寝泊まりし乍ら、北海道から九州まで、全国油絵旅行を夫々一ヶ月近くやって参りました。ワゴン車の後部座席をフラットにし、頭を互い違いにすれば、ゆっくり寝られて快適です。

食べ物はコンビニにいくらでも有りますから、日が暮れたらどこでも止めて寝ます。他にも、沖縄、小笠原、オーストラリア、フランスでも油絵を描いて歩きました。同君は人から「あんな男とよくも何度も一ヶ月も、共同生活が出来たとは。」と驚かれたそうであります。（笑）

それから又、老人ホーム慰問のボランティアで一人芝居も何度かやって参りました。

カラオケだとお金はかかるし、他人の下手な歌を我慢して聞き乍ら、順番待ちをせねばならないけど、老人ホームだと只で好きなだけ幾らでも歌えます。

三味線とギターを片手に歌や科白や振付けの踊りや女装など、いい加減なものでありますが、老人ホームをあちこち200回も回りました。歌のレパートリーは古い流行歌ばっかりで、500曲程であります。瞼の母などやりますと、おばあちゃん達が「生きてて良かった！」と言って涙を流してくれます。こっちこそ「生きてて良かった！」であります。（笑）

まあそのような旅行や一人芝居のボランティア等いろいろやっておりましたが、小泉総理大臣の時、総理直属の「生活達人委員会」というのが出来、推薦する人がいて、生活達人の指名と表彰を受けました。この指名は全国で300名程であります。

以上長々と近況を報告させて頂きましたが、平成23年度の総会には、是非出席させて頂きたいと存じております。

日頃思う事ですが、何時もの総会は型に嵌った定番の挨拶スピーチが殆どでウンザリです。も少し挨拶は半減し、あと半分は会員有志による余興中心にして頂けると随分面白くなり、出席者も殖えるのではないでしょうか。

私も当日、終りの頃5分間だけ、余興のスピーチをやらせて頂ければ幸いです。

前車の轍をふまざるは

松　村　昭太郎

私は今年80歳になります。数年前からガンの闘病生活の老兵ですが、折角の機会を頂き拙文を決意しました。

諺に“鳥の正に死なんとするやその声や悲し。人の正に死なんとするやその言やよし”とあります。会報はOBのみならず若い方も読まれると聞きましたので、私の経験と失敗を他山の石としてお読み下されば幸甚です。

1. 若い時の苦労は買ってでもせよ。

私は1951年にニチメン名古屋支店に入社しましたが、大阪本社へ移る4年間に営業、非営業を含め4つの課を廻りました。若い中にこんなに多くの経験をした人はごく稀れです。当時の日本は朝鮮戦争後のスターリン不況で、6割の高配当を行った会社も翌年から無配・昇給ストップという惨状となりました。因みに初任給は月6，000円（17米ドル）、現在は20万円と思いますが、これは2，500米ドルとなります。企業経営の困難さはこの一事からでもよく分ります。競争に生き抜く為にはイチローの如く人の何倍かの努力が必要です。双日現役の諸兄の御奮闘を祈ります。

大阪では化繊織物の輸出を担当しました。初めは東阿3国丈でしたが、西アフリカ、スーダン、コンゴ迄拡大し、遂にはヴェトナム迄引受けました。こんなに広大な地域と取引きすると、自然に各国の様子が分ります。私が注目したのはナイジェリアでした。商内の量がずば抜けて多いのです。殆どがヨーロッパの植民地で、英国は落日前の最後の輝きを放っていました。当時の英ポンドは1，008円、今の8倍で、如何に大英帝国が没落したか分ります。

2. 鶏口となるも牛後となるなかれ。

1959年ナイジェリア駐在を命ぜられた私はラゴスに赴任しました。当時日本の外貨保有は僅か20億ドル、3ヶ月の輸入外貨量で、これを下廻ると政府は輸出奨励策をとらざるを得ませんでした。

ラゴスはダッカと並んで最悪の気候の地でした。商社マンは10人足らず、領事館は館員3名丈で、小麦倉庫の2階にありました。勿論駐在員は全員単身赴任です。

繊維商内は競争が激しく、利益は殆どありません。それでも外貨手取り率の高い化繊は最貧国のアフリカ向けの主力商品でした。こんな状態が長続きする筈はない、もっと安定した商内は、と考えた私は次の目標を立てました。

A．非繊維でハイテクな商品の販売をはかること。
B．独立後に予想される工業化の研究を行い、合弁企業の実現をはかること。

私はホテル暮らしを止め、大手レバノン商B氏の離れに住むこととし、事務所開設を行い2名の長期ビザ取得に成功しました。それ迄商社マンは観光ビザ（3ヶ月）の繰り返しで、もぐり営業をしていたのです。気候も悪く、ふみ込んだ商内を考えたくはなかったのです。事務所開設はニチメンが第1号でした。

B氏宅には多くのレバノン人が集まり毎日昼食を共にしました。その結果多くの知己を得ました。これは私の大きな資産となります。

東京の機械本部から日産自動車販売の依頼を受けた私は、繊維商内の合間にラゴス中のカーディラー（約20社）を廻りました。結局どこも引受け手がなく、繊維商で英国育ちのレバノン人のL氏が引受けることになりました。第1年の責任引取り量は僅か25台、それが日産の輸出第3位迄増大するとは夢にも思いませんでした。勿論これにはL氏の努力とニチメンの協力の賜物ですが、私も危く命を失う危機がありました。

当時タンザニアで毛布工場を始めたNさんがラゴスに来られ、学校の先輩だったことが分りました。私は二人でカドナに出張し州政府を訪問し、日本人は絶対入れないと聞いていたカドナテキスタイルの幹部と面会し、貴重な話を聞くことが出来ました。この経験は後のアレワ紡調査団に同行した際に大きな効果を生むことになります。本社へ長文のプロジェクトレポートを送りましたが、完全に無視されました。

3. 失敗に挫ける勿れ、陽は又昇る。

2年半のラゴス駐在を終って帰国した私に告げられたのは、名古屋支社への転勤でした。帰国直

前に来られた大株主のYさんから頼まれた手紙を半ズボンの腰のポケットに入れるという失態を演じ、それが会社に傳えられたことに対する左遷でした。大いに反省しましたが、折角開拓したナイジェリア商内を、と腹も立ちました。人生を変えるなら今か、と考える日もありました。

アレワ紡調査団長のTさんが来られたのは1962年の冬でした。ナイジェリア政府の要請でスタートした合弁紡績計画は大詰めの段階に入り、取扱い商社としてニチメンを考えている。ついては私に来てほしいとのことでした。

左遷のこともあり斜陽の繊維産業へ行くのは迷いましたが、私が最も私淑していたS支社長の説得を受け、私は参加を決めた次第です。

アレワ紡については御存知の方も多いので、語る必要はありません。お手伝いのつもりだったのが13年をカドナで過すことになりました。合計で17年のナイジェリア生活です。人生の最も充実した時を送った私ですが、情勢は大きく変わりました。独立後6年目の軍事クーデター、ビアフラ内戦、戦後の民族自立化と外人排斥への動き等々、その中でアレワ紡は幸運な発展を遂げることが出来ました。

日産自動車とアレワ紡の二つの商権をもったニチメンは、対日輸入の1割以上を10年以上も享受出来ました。これは私の自身への秘めた誇りです。

人生に幸・不運はつきものです。サラリーマン生活は終って見れば詰らないかも知れません。しかし私は島耕作の様に、与えられた職場で全力投球をする方が好きです。尤も今はグローバル的で自己を主張すべきと思いますが、不運にめげず全力を尽くすのが結局は己れの為と思います。

4. 指示は熟考してから従え、沈黙は金に非ず。

アレワ紡では私を除いては全部十大紡からの出向者でした。随分イヂメにも会いましたが、何とか職責を全う出来たのは幸運でした。しかし意見の相違は多く、今にして思えば後悔することが多々ありました。技術以外の仕事は全部やり、6年目にカンパニーセクレタリーとなりましたが、社長のKさんからアレワ専属になる様要請されました。一株も持ってない商社マンがNo. 2となるのは問題だったのです。創業5年目に株主である十大紡の社長を招待し盛大な式典を行った時も、時期尚早と反対を申して、こっぴどく叱責されました。その結果社長交代となったことはアレワにとって残念の極みでした。

後任の社長はモザイク細工の様な合弁企業のトップには不向きな方でした。社内の結束も乱れ、アレワの将来を危惧した私は状況を親会社に申し上げ、同時に私も責任をとる旨伝えました。考えた末の結論でしたがベストとは言えません。これも運命です。当時設立計画中だったゴンベテキスタイル中止の責任をとったということで私のナイジェリア生活は終りました。

20年近いアフリカ暮しで、ボロボロの体になっていました。マラリアは10回以上、

自動車事故で歯は殆どなくなりました。体を治すのが第一の日々だったと記憶しています。

半ば忘れられた私が帰って来たのは会社では迷惑だったかも知れません。出身部のない私は東京の開発室で一兵卒として再出発することになりました。ビジネスに対し興味を失った私は給料分は稼ぐべきと思い、全く未知の原子力商内に取組みました。動燃のウラン鉱山の対日輸出権を入手出来ました。発表日に400円だったニチメンの株が60円も上ったことを覚えています。

残念ながら、会社はエネルギー商内への体力も経験もありませんでした。冷戦終結から最近の資源ブーム迄は20年以上の空間があります。新しい商内はこの点を十分に考えるのが肝要と思います。

5. 決して官僚的にならぬこと。

長いブランクを経て復社した私はニチメンに幻滅を感じました。経営層の多くが上ばかり見て走っており、下からの声を聞いて創造力を発揮しなかったからです。低成長に入った日本経済に全体が内攻的になったのを痛感しました。組織の肥大化に伴う官僚化が最大の原因と思います。

中国大使に着任された伊藤忠の丹羽元社長は、就任後毎日、全社員向けのメッセージをブログに流し意見を直接社長宛に返す様にされていた旨をOBの人から聞きました。今は当然のことでしょうが商社は人が唯一の財産です。双日の経営陣が最善の行動と選択をされんことを祈ります。

6. 人間万事塞翁が馬。

長々と勝手なことを申し上げ、深謝します。

サラリーマン生活も過ぎれば一瞬の感があります。毎日が日曜日の生活を充実させる為には社会、地域奉仕か自分に合った趣味を持ち、よき友を持つことがQOLを保持する最良の道と思います。OBの皆様もお元気で長生きされることを祈っています。

頭の悪い取り柄のない私とお付き合い頂き本当に有難うございました。（完）

囲 碁 交 遊 抄

大　山　弘　雄

囲碁を趣味としている人は、自宅に親しい友人を招いて碁盤を囲む場合もあるが、一般的には、近所の碁会所や公民館などの一室で対局を楽しむことが多いと思う。私も例外ではなく、会社囲碁部OB会のほかにも、普段は地元の公民館に併設された六十歳以上のたまり場である「憩の家」へ出かけて仲間（登録会員約70名の同好会を結成している）と囲碁を楽しんでいる。おかげで友達が居なくて困ることもないし、幼い子供達と一緒に楽しむ機会もあり、ボケ防止には大いに役立っていると信じている。

とにかく、退職後の趣味としての囲碁はお勧め商品なのである。

さて、最近の私は昼間の対局に飽きたらず、インターネットの碁会所にも加入して夜間の対局も楽しむようになった。この場合、日中でも対局は勿論可能なのだが、相手が限られるし、何となく気分が乗らないことから、どうしても夕食を終えて少し経った9時前後から始めることが多い。

ネット碁の利点としては次のようなものが考えられる：

天気や服装を気にしないで自宅に居ながらにして碁が打てる

自分の好きな時間帯を選べる

相手が全国・世界に散らばっていて老若男女を問わず誰とでも気軽に打てる

対局では実力に見合った相手との手合い差（ハンデキャップ）が自動的に示され、勝敗の判定もパソコンが自動的にやってくれるので煩わしさがない

対局後、チャット（パソコン画面に文字を打ち込んで行う会話）を通じてお互いに感想を述べ合い、着手の善悪などを検討することが出来る

自分が打たなくても他人の対局（同時に2面）を見て楽しむことが可能。対局者に知られず（対局の邪魔にならぬよう）、観戦者同士のチャットもできる

棋譜が記録として残り、パソコンのプリンターから印刷したり、その気になれば他の会員の棋譜を見て勉強することも出来る・・・等。

難点は、相手が目の前に居ないので現実感が出てこないことだが、私の加入しているネットの碁会所では、パソコンの対局画面に対局者の顔写真を載せるような仕掛けにしてあるので相手のイメージが掴みやすい。また、「○○会社勤務」、「△△大学OB」、「NY在住」といった表示も併記できるため親近感が湧きやすく、上記の難点はかなり解消されていると言えよう。

このように、ネット碁はインターネットにつながるパソコンを持っている人なら誰でも参加して楽しむことができる有り難い仕組みだが、お陰で交友関係にも会社や居住地域の枠を超えた広がりを持つことが出来るようになった。

旧日商岩井囲碁部OBの方々とのご縁（碁縁）もネット碁を通じてであり、幹事のSさんは赤坂のニチメン社友会室で開かれる囲碁部月例会にもしばしば顔を出され、対局後の飲み会にも参加されるなどすっかりお馴染みとなっている。Yさん、Mさん、それに私を加えた3名のNM囲碁部OBが日商岩井囲碁部OB会のインターネット月例トーナメントに参加するようになったのもSさんのお誘いによる。

さて、10月11日（月）の「体育の日」は快晴で絶好のお出かけ日和となった。私は少し早めの昼食を済ませて六本木へ向かう。世話人会や囲碁部月例会で赤坂まで出かけることはあるものの普段

はこのように都心に出ることは滅多にないので、この日は特別だった。

目的の一つは「六本木ヒルズアリーナ」で午後１時から開催される「IGO FESTIVAL 2010」へ参加すること。もう一つの目的は～これが主目的だったが、ネット碁の仲間とこの場を利用して初顔合わせをすることにあった。インターネットの碁会所では何度も対局していておしゃべり（チャット）もしているが、私の場合は面と向かって話したことがないので、この機会に一度お会いしましょうという趣旨である。

誘ってくれたのは茨城県Ｍ市在住のＫさん。高校の教師をされている女性だが、私の加入しているネット碁会所に幾つかある対局広間の中の一つでは、その主宰者となっており、他方、学校では囲碁部を立ち上げ、部員の募集やその後の指導などにも活躍中。対局後の感想戦では自分の悪手の指摘を求めるなど、非常に熱心な方である。また、時々拝見している彼女の囲碁部日記は末尾に和歌なども添えられていて楽しい読み物なのだが、生徒の観察が実に細やかで愛情を持って生徒を指導されていることがよく分かる。そして湯河原合宿を企画するなど、とにかく、行動力が抜群の才媛である。

９月のある日、そんな彼女から誘いのメールが届いた。しかも文面には､「毎年この囲碁フェスタには参加していたが、今回は忙しいので参加を取りやめようかと思っている。但し、私（筆者）が出てきてくれるようなら少し無理してでも参加したいので都合を知らせて欲しい。ダメ元なので断ってくれてもいいが、その場合は上京の機会があるたびに何度でも声を掛ける」という趣旨が記してあった。これには参った。そこまで言われて断るようでは男が廃る。一も二もなくOKの返事をしたという次第。

囲碁フェスタ当日、大体の時刻と待ち合わせ場所を決めていたのでＫさんはすぐに見つかった。９時半に家を出てバスと電車を乗り継いで駆けつけてくれたという。初対面ながら、ネットの写真とチャットやメールの交換を通じて、事前に相手のイメージは把握できていたので、まったくの初対面とは思われず、少しトンチンカンな挨拶を交わすことになったが、お誘いに感謝し、すぐに打ち解けて会話が弾んだ。

程なく現れたのは大阪市役所勤務のＩさん。前夜、彼から「明日はそちらへ出かけるのでお会いしましょう」というメールが届いていたので探していたが、彼の方はＫさんを既にご存じだったので、一緒にいた私はすぐにそれと判った様子。

次いでＷさんが姿を見せた。私と五番勝負を戦っている相手だが、Ｋさんから私が来ることを知らせてくれていたらしい。こちらはネットの写真にそっくりで紛れもなくＷさんだった。これで予定されていた４名すべてが揃ったので記念に写真を撮る。

フェスティバル会場は家族連れ、若いカップル、その他大勢の参加者で熱気に溢れていた。日本棋院の大竹理事長（九段）、張栩棋聖、武宮九段などTVでお馴染みの有名棋士も来場、また、梅沢由香里五段、謝依旻女流三冠など公開対局を行う女流棋士６名の和服姿があでやかで美しい。一般参加者はプロの指導碁を受けたり、シートを広げて仲間同士で対局したり、女流棋士の公開対局（解説付き）を間近に見学したりと、それぞれが自由に楽しめるようになっていたが、詳細についてはここでは割愛したい。

我々ネット碁仲間４名も、しばらく歓談のあと自由行動となったが、他にも多数の仲間が参加していることが判明した。私が数回対局したことのあるＡさん（花王）は小学生のお子さんと一緒、そのお子さんは別の仲間に九路盤で指導碁を打ってもらっている。他にも席亭のＮさんと一緒にお揃いのシャツでイベントの手伝いをしていた名古屋のＯさん（この方とも私は五番勝負を戦ってい

る)、システムエンジニアで持ち点の調整を手伝ってくれているHさん、東京海上OBのMさんなどとも挨拶を交わすことが出来た。

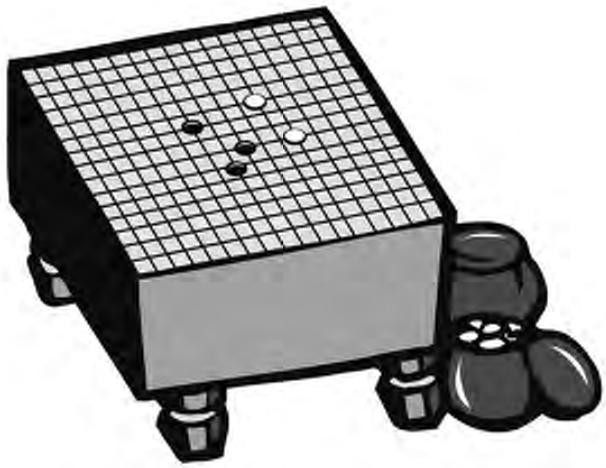
このイベントに誘ってくれたKさんとベンチに並んで女流棋士の対局を観戦していた私には一つハプニングがあった。取材にきていたNHKのインタビューを受けたことである。昨年の当「会報」№7の紙面で由紀さおりにNHKホールでマイクを向けられたエピソードをご紹介したが、その時は幸い放送にはその場面は出てこなかった。しかし今回はそういうわけにはいかず、同じ週の土曜日の定期番組「囲碁・将棋の時間」(BS 2)では大写しで放映されたらしい。

このことは、双日囲碁部のIさんがメールで知らせてくれて初めて知ったが、私自身は番組を観ていなくて、すっかり忘れていたことだった。ビデオに録ってあるので見せてあげると言われているが、見たくもあり、見たくもなし、どちらかと言えば辞退したい気持ちの方が強い。加えて、上記Oさん(名古屋在住)からも、ネット対局後のチャットで「TVに出ていましたね」と冷やかされる始末。ローカル放送と思い気軽に応じ、全国放送とは夢にも思っていなかった。何も悪いことをした訳ではないのだが、この歳で、この顔で・・・と、やはり面映ゆい。今後は気をつけることにする。

女流囲碁対局の決勝戦が終わった直後、Wさんがやってきて、司会の万波菜穂二段～NHK杯囲碁トーナメントの解説者の聞き手役を務めている～が近くに居るので一緒に写真を撮りましょうと言う。私に対するサービスで言ってくれたもので、ご好意に甘えることにした。ツー・ショットでと言われたが、Wさんにも入ってもらうことにして、傍にいたご婦人に頼み3人の記念写真を撮ってもらう。

そうこうしているうちに時間が過ぎてしまった。楽しい一日であった。夕方5時を少し回った頃、親切にしてくれた皆さんに感謝と別れを告げて家路につく。タモリの番組に「友達の友達は皆友達だ」というセリフがあったことをふと思い出した。ネットを通じ友達の輪が広がっているのは嬉しいことである。

「ネット碁の仲間つどいし囲碁フェスタ　初めて会うも懐かしき友」



老人力、華やぐ

竹　内　可　能

〈まえがき〉

以下に記す一文「老人力、華やぐ」は、私が今を去る5年ほどまえ（平成17年）書き記したものに若干の補筆をそえたものでありますが、このたびは本誌編集委員の高木亨一氏による強いお勧めもあり、ここにあえて寄稿させてもらうことにしたものであります。

後段に付録して書き加えました「後日譚」にも記しましたが、この一文をあの当時亡くなられた小説家の水上勉氏の仏前に、京都在住の氏の娘さんがお供えされていたという、まことにもってわが至福というほかない奇縁を思わざるを得ませんでした。併せてご笑読いただければ幸甚であります。

過日テレビで偶々亡くなられた水上勉氏の追悼番組（NHK）を見た。氏は晩年を私の父親の故郷（信州は北佐久の北御牧村、現東御市）で過ごしておられると聞いていたので、それ以来何かしら氏のことを身近な人のように感じていたのだ。そんなこともあってか、この番組も引きずりこまれるように見入っていたものである。

画面で見る氏の容貌は、さすがに予後の老残を感じさせて痛々しかったものゝ、たどたどしくしぼり出すような言葉の一つ一つに、私は圧倒されていた。中でも私を感動させたのは、「老人力、華やぐ」という、短いが途切れとぎれに氏の口をついで出る言葉であった。

当時氏は手足の麻痺とともに言語にも障害をきたしておられたようで、この言葉も聞き取りにくかったのだが、幸い画面の下にはすかさずテロップが流れて、「老人力、華やぐ」と写しだされていた。氏のお話によると、病後のリハビリのために通っていた施設の中で、多くの老人たちが夫々人生の最後をよりよく生きようとして、必死にリハビリに取り組んでいる姿に痛く心を動かされたのだという。

氏はそこで目の当たりにした光景の中に、老人の力が華やいでいる姿を見て取ったのだろうか。正に氏は道元禅師が説くところの「現成公案」（げんじょうこうあん）―悟りとでもいってよかろうか―を観じておられたのではなかろうか。氏は言葉こそ「現成公案」といった禅用語は使っておられなかったが、ところどころに「而今」（にこん）という道元禅師が用いる特有のむつかしい言葉を口にされていたのが大変印象深いことだった。

実は最近私も柄にもなく道元に魅せられ、増谷文雄先生の「正法眼蔵」をかじりはじめていたところだったが、とりわけ「而今」という言葉の持つ不思議な意味合いに、強い共感を覚えていたので、氏の口からこの言葉を聴いたとたん、私はあっと声をあげそうになったものだ。

「正法眼蔵」第十一、「有時」（うじ）にいう。「いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり」と。またいう。「山も時なり、海も時なり。時にあらざれば山海あるべからず。時もし壊すれば山海も壊す。時もし不壊なれば、山海も不壊なり」。［松も時なり、竹も時なり。時は飛去するとのみ解会すべからず］。

「正法眼蔵」の中でも「有時」の項は難しいとされているらしいが、ここは道元の哲学の根幹かもしれない。私もわたしなりに、唐木順三がその著書「無常」の中で示している、下記のような解説に目からうろこが落ちるのを感じた次第であった。即ち「過・現・未という飛来飛去の一点としての現在が幅をもってくることが「而今」の今である。ここで時間は空間と結びつく。無常が常と交錯する。結びつき交錯しながら経歴する。」と。きっと水上勉氏も晩年は「正法眼蔵」に傾注されていたにちがいないと思うと、不遜ながらこの私も氏に少しく同好のよしみを感じないわけにはいかなかったのだ。

話をもとに戻して氏の言葉「老人力、華やぐ」について。

この言葉をあのTVの画面で氏の口から聞き取った時、私はさすが一流の文学者にして、死の間際までも言葉の達人なのだと感心させられたものだ。

実はというもおかしいが、私も今年は満68歳になる。日本男子の平均寿命まであと約10年、いよ

いよカウントダウンが始まる、と親しい友人に年頭の雑感を手紙にして送ったものだ。しかし正直なところ、その友人には言いいそびれたがもう一つの実感があった。それは古希も間もないこの歳、このごろ私の心には加齢による肉体的な衰えとは裏腹の、微妙な人生の充実を感じることがある。

そう思うと、氏が「老人力、華やぐ」という言葉を口にされ、なんべんか「而今」という言葉を申されたのは、もしかして私の場合にだってあてはまるのではないか、私は勝手ながらそう解釈したのであった。

つらつら思うに、「華やぐ」という言葉の語感には、それ自体といってもよいような日本語独特の穏やかな響きがあるように思われる。同じ花でも「花」の方はより具象的で、「華」は抽象的といったところが文字面の違いだろうが、「華やぐ」という語感となると、「そよぐ」とか「さやぐ」、「やわらぐ」とか「凪ぐ」あるいは「やすらぐ」といった言葉の持つ語感に類似的であることに気づかされる。つまりこれらの言葉から共通して感じられるのは、一種の［幽けさ］であり「静かさ」とでもいうべきものかと思う。「華やぐ」という言葉は、老人の力にふさわしい「華やか」な中にも幽かで静かな意味合いを感じさせるのである。

思えば近頃、私の心にふっと芽生えてきた余生の充実感のようなものも、この種の「華やぎ」であったのか。そうだ、そうかもしれない。早い話が定年後にせめて数少ない趣味のひとつにと始めたゴルフだが、そろそろ年齢的な賞味期限もま近かに迫ろうかという昨今、時として今までにないボールの飛距離だの、80台のスコアだって出すことがある。これぞ老人力の「華やぎ」でなくて何なのかと思う。たとえそれが蝋燭の灯の最後にひとしきり明るい「ゆらぎ」だったとしてもだ。

ついでにもうひとつ、私の老後に大切な読書のなかに見る、私の「華やぐ老人力」のことを書きとめておきたい。

川端茅舎という有名な俳人の句に、「ぜんまいの　のの字ばかりの　寂光土」という私の好きな俳句があったが、ここでいう寂光土というのは、多分仏教的な「滅びの光」（寂滅の光）がさしこむ浄土を指すものにちがいない。私は水上勉という当代きっての大作家が、「華やぐ老人力」という時の華やぎは、どうやらこのような滅びの光の発する華やぎを、心にイメージしていたのではないかと思う。

因みに最近私がもっとも感動して読んだ本の中に、辻邦生の「西行花伝」と「春の戴冠」という作品がある。前者はいうまでもなく西行の、そして後者はイタリア・ルネッサンス期の大画家ボッテチェルリの、いずれも伝記風小説だ。これらの小説に共通して作者辻邦生が美しく克明に歌い上げている主題は、ほかでもない、一人の吟遊詩人の、そしてもう一人は画家の、それぞれに歩んだ人生の無常であった。

しかし私が今ここで言いたいのはそのような無常観についてではない。おそらくはこの作家の透徹した無常の世界なら、私がこれまで辿ってきた青年期であれ壮年期にあっても、私は今に等しく或いはそれ以上に感応していたことだろう。しかしそれが今は少しちがう。どこがちがうのかといえば、私が今も共鳴してやまない、辻邦生の無常の世界にすら、今までとは違う心の安らぎにも似た「華やぎ」を覚えることである。私はそれを「老人力」という言葉に置き換えてもよいのではないか思う。

もう一人最近感動した作家と二つの作品をあげておきたい。それは堀田善衛の「ミシェル・城館の人」と「ゴヤ」である。前者はフランス16世紀の思想家・モラリストのミシェル・モンテーニュと、後者は17～18世紀スペインが生んだ大画家ゴヤの、これまた伝記風小説である。

堀田善衛は、時代も国も又分野もまるで異なる主人公が、それぞれに生きぬいた数奇な生き様を、歴史や文明といった光芒の中に照らしながら、政治や文学、或いは芸術を通して変幻自在に描き出してゆく。作者の筆を支えているのは、堀田善衛という稀有な日本人モラリストの、あくことをしらぬ人間と人間性探求の精神であった。

その堀田善衛も逝って久しい。いつも泰然自若として老大家風だった彼の姿が、なぜかこの間TVの画面に現れた水上勉氏と二重写しに思い出されたのである。

平成17年5月風薫る日に、（おわり）

追記（後日譚）

実は故水上勉氏を偲ぶこの一文のことで、私にとっては記念すべき後日譚がある。ここに記して私の貴重な思い出としたい。

五年ほど前、先述のようにNHKの追悼番組がご縁でものした一文「老人力、華やぐ」を、私は京田辺市に住む荒井まき子さんという女流画家に送った。この方は私の高校時代の友人である荒井正自君の奥方で、今も「示現会」という画壇に拠って活躍されているが、ご出身がやはり私の父親の故郷、あの北御牧村（今は村とは言わないのだが）なので、私も毎年欠かさず「示現会」に出展されている彼女の大作を観にゆくのを楽しみにしてきた。

そんなわけであえて彼女に一文をお届けしたのは、四季を通じて浅間山がたたえる北御牧村の美しい自然への敬慕と、その地で亡くなった水上勉が語る老人力の華やぎへの畏敬の念を、わが父と同郷の荒井夫人と分かち合いたいと思ったからであった。

ところがそれから暫くして荒井君から突然電話があった。聞いてみて、あっとばかりびっくりさせられたのだ。ご夫人のまき子さんは以前から京都に住まわれる水上勉氏の娘さんとお付き合いがあり、何かの機会があって私のこの一文を彼女にお見せしたのだという。さらに私を驚かせたのは、彼女の言うにはこの一文を亡父の水上勉の仏前に供えてやりたいので、これをコピーしてもよいかどうか作者の了解を得ておいて欲しいと。荒井君は続けて、そういうわけだから念のためこうして電話で君の確認を求める次第だと言うのだった。

むろんいや応云々どころの話ではない。私は天にも昇る心地で故水上勉氏の娘さんの、もったいないお求めに応じさせてもらった。奇遇による一文の冥利とはこのことに尽きる、と私は驚嘆したのだった。

平成22年或る暑い夏の日に、（おわり）

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

2011年度ニチメン東京社友会年会費支払について

2011年度の年会費（3,000円）の支払をお願い致します。
支払い期限は2011年9月30日です。支払い方法は下記の3通りから選んで下さい。

1）2011年7月開催予定の社友会**総会・懇親会での現金による支払い**。

2）銀行振り込み：**三菱東京UFJ銀行・東京営業部**
普通口座：8225155
口座名義：ニチメン東京社友会　代表倉又則夫
尚、振り込み手数料は振込人の負担にてお願いします。

3）郵貯銀行にての振込：
口座番号：00100－4－318041
口座名義：ニチメン東京社友会
この場合、ご依頼人欄に住所・氏名を明記願います。

尚、振込手数料は振込人の負担でお願いします（窓口にての支払いは120円）。ATMご利用の場合の手数料は80円です。上記払い込みはコンビニでは取り扱っておりません。

奈良だより・平城宮跡への散歩

丸　尾　嘉　重（大阪社友会会員）

私の住む奈良市は今年大変なにぎわいをみせている。言うまでもなく、和銅３年（西暦では710年）、現在の奈良市に当る平城京に都が移されてから今年は丁度1300年にあたるので、数々のイベントが催されているからである。

先日久しぶりにその平城京跡をたずねようと、家から歩いて出かけた。

薬師寺、唐招提寺、垂仁天皇陵などを通りすぎ、秋篠川を北へ行くとやがて平城宮跡に出る。バスと電車でならいくらの距離でもないが、徒歩なので１時間余りかかった。私の家は奈良市の七条町にある。平城京は現在の九条町の辺りを南端としているので、七条町からではほぼ南北を歩いてきた事になる。

この平城宮は、平城京の北におかれ当時天皇の居所があり、中央政府機構の所在地でもあった。ここには貴族役人をはじめ、労役に従事する者も含め１万人近い人々が毎日働いていたと言われている。

現在平城宮跡は近鉄西大寺駅から歩いて約10分のところにあり、南北約1．0km、東西1．3kmの広大な土地がそのまま保存されている。昨年迄はここは市民の憩いの場として親しまれてきたが、今年は様子が異なり、遷都1300年を記念して正面に大極殿が復元されて、この日も大勢の観光客がおしよせていた。

（平城京の誕生と消滅）

都が前の藤原京（西暦694－710年）から移されてきた時の資料によれば、平城京は当時の交通運輸の一大中心地であった難波津とは木津川と淀川で結ばれ、又佐保川を下れば大和川に出ることも出来、経済上、交通の便からみて都としては当時最適の場所であった。しかし、その都の様子も段々に変化して行き、道鏡事件（女皇称徳天皇が僧道鏡と密着して政治をひとりじめ）や井上皇后事件（皇后が我子の早期即位を願って天皇を呪詛したと探索を受ける）など、堕落の様相を示すようになり、遂に西暦784年都は長岡京に遷り、ついで西暦794年京都平安京に遷った。その間平城天皇の時代に都を平城に遷すくわだてがあったが、失敗におわり、以後政治の中心は平城に戻らなかった。

（平城宮跡保存に向けて）

こうして明治維新を迎える頃迄の約1100年間、この宮跡は顧見られず、一面の牛馬の踏みならす田畑と変わってしまい、これが元皇居のあった処とは思えない寂れた有様になっていた。

この平城宮跡を昔の姿に保存しようとする運動がはじまったのは、ようやく明治30年になって、明治27年（1894年）に京都で平安遷都を記念して平安神宮がつくられたことに刺激を受けたものであるが、上記の法律が定められたとは言え、実際に実行されるには棚田嘉十郎という熱心な推進者が出てくるのを待たなければならなかった。

（棚田嘉十郎の活躍）

棚田嘉十郎は奈良に住む植木職人であったが、奈良公園の植木御用をつとめるようになって、平城宮跡に関心をもつようになった。どこに宮跡があったのかを知る人も少ない状態であったが、その実際の在り場所を知り、只の田畑と化している姿をなげき悲しみ何とかこれを保存しようと決意するようになった。明治34年（1901年）奈良県赤十字大会が開催され、総裁の小松宮殿下が訪れた時のことである、棚田は殿下と会う事が出来、「平城宮跡の保存をしっかり頼む」との殿下の言葉に感激し、佐木村の住人、溝辺文四郎の協力も得、以後各方面の協力を求めて、東奔西走の活動がはじまった。

宮跡を復元すると言っても広大な田畑を別の場所に用意してやらなければならない。財政的援助がなければ到底出来ない話である。

この棚田の活動も間もなく勃発した日露戦争のため一旦頓挫することになる。この戦争のための戦費を外債に頼り、戦争には勝利したものの当てにしていた賠償金をとることが出来ず、財政の大赤字をかかえた国に農地買上げの資金を頼むことなど出来ない相談であった。

その後、明治43年（1910年）平城遷都1200年を機に保存会が組織され民有地の買取運動がはじめられたが、未だ遅々たるものであった。

しかし明治45年（1912年）明治天皇が崩御し大正天皇が即位し、その大礼を記念する事業として

平城宮跡保存運動が一気に盛り上がることになった。

大正2年（1913年）徳川公爵を会長とする大極殿保存会が出来、周辺9ヘクタール余りが先ず確保出来た。

その後又大正11年内務省は、その地を含む約47ヘクタールを史宮に指定した。（大部分は民有地のまま）こうして棚田の20年来の悲願は成就していった。

（棚田の死）

然し、その功労者、棚田嘉十郎はその喜びを目前にしながら2年前に亡くなっていた。それも割腹自殺という異常な死に方である。何故棚田は死ななければならなかったか。事情に詳しい人の話によると、この宮跡保存に乗りだしてきた某新興宗教団体が重大な不敬行為を行ったこと。（詳細は省略）この事態に自らの私財まで投げうって保存運動に尽くしてきた棚田の善意が裏切られたことに悲観し、また人一倍責任感の強いこともあって、この様な痛ましい死を遂げることに至ったものと思われる。

しかしこの棚田の死を契機として、この宗教団体は身を引き重大なトラブルは解決した。宮跡保存の基盤が棚田のこの善意と実行力によって築かれた。

棚田の功績をたたえて平城宮跡朱雀門近くには棚田の像が建てられている。又、JR奈良駅前広場には棚田が独力で建てた平城宮大極殿址への道順を示す石の道標が保存されている。

（その後の平城宮跡）

大正11年の史跡指定は、宮跡保存の画期的な出来事であったが、この地点での国有化土地は全体の約一割に充たなかった。

その後30年程、この地域が都市文化の発達から残されていたという偶然の事情で、あまり問題がおきなかった。

問題がおきたのは、戦後昭和28年に日米行政協定に基づき、この近くの米軍キャンプ用の道路工事がはじまった時のことである。この時、地下から建築遺構があらわれ、宮跡全体の保存と研究の必要を痛感させられることになった。

国もようやく腰を上げ、継続的に宮跡の発掘調査が行われた。

その後、昭和37年になって、一つの事件がおきる。近鉄が宮跡内でその時史跡に指定されていなかった場所に車庫等を建てようとした。文化財保護委員は史跡に指定されていないのでこれを断る理由がないとして承認。宮跡に破壊の危機が迫った。

この事が報道されるや、学会、教育界から猛反対の声があがり、この世論の高まりを見て、政府も遂に宮跡全域の国費買上げ（総計71ヘクタール）を決め、以前の分を含め、約80ヘクタールの土地が国有化されたのである。

{参考資料}
「奈良－古代史への旅」（直木孝次郎著）
「小説　棚田嘉十郎－平城宮跡保存の先覚者」
（中田善明著）

Boston Tea Party＝「ボストン茶会事件」色々なParty

浜　地　道　雄

世界史で習ったところによると、イギリス政府の課した紅茶税金（Tea Act）に反発した市民が、1773年、ボストン港に停泊中の運搬船を襲撃、満載の茶箱を海中に投げ捨て、それが二年後の独立戦争の先駆けになったとある。

では、Tea Party＝お茶会でもやったのか？ 何だか腑に落ちない。そこで辞書を引くとParty には「騒乱」「騒ぎ」という米語の意味があり、従い正しくは単に「紅茶事件」と訳すべきであろう。

さて、米国におけるビジネス活動で大事なのはパーティーである。Associationという「業界団体」は自主性を重んじた「職能協会」とも言うべきNPOで、それぞれの専門動向や技術の報告が行われる。時には「転社（転職でなく）」の相談コーナーまであるから、驚く。

その数四千とも言われるこのAssociationの年次総会の後はParty＝懇親会である。

大体、全米の観光地でのことゆえ、一種の慰安旅行でもあるから楽しいはずだが、両手にグラスと食べ物を持ち、音楽バンドなど雑踏（失礼）を背景に初対面のアメリカ人と「英会話」というのは我々には難しい。仕事の話は何とかこなすとして、日常生活、文化・芸術となると大変。

日本の手引書では、こういったPartyでは政治の話はタブーということになってるが、実際にはしばしばParty＝政党の話がでる。政策論争Argumentは適切ではないが、the Democratic Donkey and the Republican Elephant、つまり二大政党のシンボル、ロバか象かなどは常識として知っておいたほうがよい。

実際、二大政党の基本姿勢はビジネス上も重要な影響がありうるので、頭に叩き込まねばならない。

オバマ大統領が率いる民主党（Democratic Party）は 伝統的に「大きな政府」のスローガンのもと政府主導の政策を実践。

ブッシュの率いる共和党（Republican Party）は "GOP"（Grand Old Party）と愛称されるが、企業の自由活動を主軸に「小さな政府」を志向、従い減税・規制緩和を重視。

日本の民主党DPJ=Democratic Party of Japan、自民党LDP＝Liberal Democratic Partyだ。

Partyはビジネス実務で重要な契約書にも登場する。
First PartyとSecond Partyという二つの「当事者」によって調印されるが、
Third Party（第三者）がWitness（証人）としてサインすることもある。
他方、製造業やIT業界ではまた別の意味がある。
First Party＝メーカー。Second Party＝系列、そしてThird Partyは「純正品」に相対する意味である。

メーカー（First Party）が本来行うべきこと（Core Competence）以外の製造・計算や、メンテナンスサービスなどは、技術の専門集団であるThird Party（時にはインドなど海外）にアウトソーシング（外注）されることが多い。

以上に見るごとく、一口にPartyといっても「懇親会」、「政党」、「当事者」、「騒ぎ」とあり、色々だ。因みにparty-coloredとは「色々」を意味する。

（社）日本在外企業協会 「グローバル経営」より転載・加筆

映画評論

映画鑑賞記『氷雪の門』と『アルゼンチンタンゴ』

澁　谷　　義

＜1. 氷雪の門、樺太1945年 夏 ＞

36年前ソ連の圧力によって封印された幻の名作！！ 1945年8月20日、樺太で失われた電話交換手の乙女たちの命、これは時代に圧殺された真実の物語。

1974年制作費5億数千万円を越す超大作だった。戦闘シーンは自衛隊の全面協力もあった。然しながら、ソ連大使館から「反ソ映画の上映は困る」との抗議で、あっさり自粛。その後、東映配給により北海道、九州で小規模に上映されたが、実質的に日の目を見ることはなかった。今回の尖閣諸島を巡る中国への日本の対応と同様、大国のゴリ押しに弱腰の日本である。

2004年、貴重なフィルムが発掘され、今夏劇場公開となった。去る8月18日、横浜の小さな映画館 Jack & Bettyで鑑賞した。最近はようやく多くの映画館で上映されているようだ。

1945年の夏、太平洋戦争は既に終末を迎えていたが、ソ連が突如として参戦、日本への進撃を開始した。終戦の8月15日を過ぎて、20日には樺太の真岡町にもソ連艦隊が砲撃を開始、町は炎につつまれた。真岡の交換嬢たち9人は最後まで職場を死守した。最後の青酸カリによる乙女達の自決は悲愴・悲惨であった。

氷雪の門は、北海道稚内公園にある。樺太で亡くなったすべての人々の慰霊塔である。戦争への怒りと、平和への願いを込めており、本映画も同じ願いで作られた。

ソ連が日ソ中立条約を無視し。昭和20年8月9日、日本勢力下の満州、日本領の朝鮮、樺太で突如攻撃を開始した。8月25日、ソ連軍により樺太はソ連占領下に入った。

監督は村山三男、主な俳優は、丹波哲郎、千秋実、藤岡重慶、黒沢年男、田村高広、仁木てるみ、藤田弓子、南田洋子などで、監督を始め既に鬼籍に入った俳優もいる。

＜2. アルゼンチンタンゴ、伝説のマエストロたち＞

上記映画と同じ映画館 Jack & Bettyで、去る10月2日に鑑賞した。アルゼンチンタンゴの歯切れのよいダイナミックな音楽・マエストロ（巨匠）たちの指揮に打ち込む姿・絡み合う男女の情熱的なダンスに酔いしれた。

アルゼンチンタンゴの原点は、アルゼンチンとウルグアイに生きる移民たちの「心のよりどころ」としての民衆音楽にある。140年ほどの歴史を有する。当初タンゴはフルートやギターなどの小編成で演奏されたが、1920年代からバンドネオン・バイオリン・ピアノ・コントラバスによる「オルケスタ・ティピカ」が標準編成となった。

ところで、スペイン南部で古くからタンゴという音楽形式があった。これが現在のタンゴの母体であるという。このスペインのタンゴは、キューバのハバネラ（舞曲）の影響を受けた。タンゴは南米に伝えられて、ドイツで発明されたバンドネオンを得てブエノスアイレスで成熟したタンゴになって、ヨーロッパに逆輸入された。欧州の各地に広まったコンチネンタルタンゴは、バンドネオンをあまり用いられず、弦楽器の美しい音色が主となった。

社交ダンスのモダン（スタンダード）の5種目の一つであるタンゴは、コンチネンタルをタンゴの音楽をベースにしている。

書評

『豊饒の海、四巻』　三島由紀夫　著（新潮社）

澁　谷　　義

三島由紀夫の本名は、平岡公威（きみたけ）。
20世紀西欧文学を学び、秩序と神話を志向、純粋日本原理を模索して自裁。仮面の告白、金閣寺、豊饒（ほうじょう）の海などが著名。1925～1970。45年の人生であった。

豊饒の海四巻は、読み応えがあった。春の雪、奔馬、暁の寺、天人五衰の四巻で、合計1383頁。三島由紀夫最後の、壮大な問題作である。一種の大河小説への試みである。日露戦争後の明治末から描き始めて昭和の太平洋戦争の前後、さらに執筆時のぎりぎりの現代までを書いている。昭和40年から5年以上にわたり雑誌「新潮」に連載された。その後は絶筆し、まもなく三島は盾の会に打ち込み、市ヶ谷自衛隊駐屯地の前で自決した。三島の自決は、当時の雑誌などに掲載された。自ら腹を切り、盾の会隊長に首を刎ねさせたシーンを見て、ゾーッとし寒気を覚えた記憶がある。

四部作は転生の物語である。観察者で副主人公の本多繁邦（判事から弁護士）は、18歳の青年として登場し、やがて80歳の老翁として最後の場面にも現れる。一巻の最後の註では、豊饒の海は「浜松中納言物語」を典拠とした夢と転生の物語であると明言している。一巻ごとに主人公は夭折し、次巻では別の人間として、転生してくるパターンを繰り返している。

一巻では、松枝侯爵の息子である美男の松枝清顕（まつがえきよあき）が主人公で登場するが、20歳で夭折。綾倉伯爵の美貌の娘・聡子と清顕は恋仲であったが、聡子が宮家に嫁ぐことに反対しなかった。聡子は清顕の子供を宿したが、堕胎させられた。こんな後、聡子は奈良の月修寺の尼僧になり俗世と断絶した。清顕は聡子に遭いたがったが、会えずに病死した。

二巻奔馬では、主人公の飯沼勲は、一巻の清顕の生まれ変わりとなって登場する。剣道の達人で神風連を志し、腐敗した政治と疲弊した社会を改革せんとし行動する。政財界の大物・蔵原武介を殺害した後、海岸で切腹した。

三巻・四巻では、ワキ役だった本多が主人公となって登場する。資産家になった本多繁邦は若い透を養子として迎える。ところが、繁邦と透は反目しあう。繁邦は覗き屋として傷害犯人に間違えられ、めっきり老いる。一方、透は自殺行為を繰り返し盲目になった。舞台はインド、タイまでに広がり、王子たちの転生の物語も展開される。

本多繁邦は晩年、月修寺の老いた尼僧の聡子にようやく面会できたが、清顕のことを話しても、そんな人は知らないと言われて、唖然とする。

四巻の天人五衰の最終章を書き上げた時に、三島は切腹することを決めていた。読了して何とも複雑な感慨に襲われ、三島の悲壮感に圧倒された。

昭和36年入社の皆さんへ

髙　木　亨　一

この写真、見覚えありませんか？　あなたはどこか、わかりますか？？

去る、９月中旬、36年同期の田中長典さんより電話があった。10月23日にニチメン機友会の懇親会に、例年電子電機部門からの、出席者が少ないので、関西方面からの応援をと、元電子電機本部の先輩で最近機友会の常任幹事代表に就任された、朝倉重道さんより要請を受け、上京するのでヨロシク、その見返りと言う事ではないが、来る、10月29日ニチメン36会と称して。36年入社の同期会を企画している、今回は５回目になる、是非とも、顔を出して欲しい。

数日後、村松正司さんから“**第５回ニチメン36会開催のお知らせ**”が届いた、
田上正靖、丸尾嘉重、田中長典　田村進平、髙木啓志郎、村松正司の６名が幹事として名前を連ねていた。

日時；**2010年10月29日（金）**　17：00～20：00
場所；**日本綿業倶楽部**　（綿業会館内レストラン）
会費：7000円

そして、上の写真が転載されていて、‘ご参加の方には上記写真のＡ４版お渡しします。’

会費の金額と、日帰りが難しい時間の二点に抵抗があったが、長典さんからの要望にこたえるべく重い腰を上げることにした。

因みに、今年は入社足掛け50年になるらしい。なんと半世紀前の写真です。

昭和36年入社の大卒＋高卒（除く女子）は史上２番目に多く212名（内、高卒80名）それらが一堂に会した**集合写真が上の写真です。36年４月大阪本社ビルでの入社式の後、屋上で撮ったものです。**
最前列の中央には岡島社長、福井専務他　当時の役員の方々がおられる。
肝心の自分がどこにいるのか未だに見つからず。

早めに大阪にはいった、プラント時代の仲間であった山本勝之さんが奈良からわざわざ会いに来てくれた。彼は今、「斑鳩の里観光ボランティアの会」に所属し、法隆寺のガイドをしながら一期一会を堪能しておると語る、日に焼けた顔が印象的であった。　法隆寺に行かれる機会があったら、訪ねてやってほしい。

そこに、36年同期で一時東京に単身赴任、同じ課で働いた、稲治寿さんが会場までご一緒しましょうと、態々、立ち寄ってくれた。

会場の綿業会館は、2003年に“国の重要文化財”

に指定され、更に、2007年には［近代化産業遺産］にも指定された、まことにすばらしい建築物であった。

参加者26名

東京からの参加者は3人、岡島岩男、川西　勲と私ですが、元々大阪のお二人、珍客は私一人だった。おかげで、メインゲストの如く熱烈歓迎を受け、恐縮した。

久し振りと再会を楽しんだのは、田村進平、と田中長典さん。

お互いに、「何でお前はここに居るのだ？」と、米田圭祐さん（社内の基準年齢は34年のはずだが、実際に入社したのが36年だから必要に応じ34または36と使い分けている、）「本件に関しては36にしている。」先週の東京での機友会にも出席された。

岡島岩男さんはニチメン慶応会の立ち上げにご一緒して2年前以来ニチメン慶応会のメンバーだが、会うのは初めの，斎藤久さん、同姓の為、存在は知っていて意識してた、髙木啓志郎さん、圧巻はお互いに相手は年上だと、まさか同期とは今の今まで知らずに敬語で会話していた、川西勲さん、機械村の仲間で大病されたと聞いていたが杖をついておられたが、いたって元気そうな片岡修さん。

あっという間の3時間、だった、その日の宿、中之島インまで便乗、送り届けてもらう。

皆良い奴ばかりだった。

なにしろ、50年前に同じ屋根の下で研修を受け、更に同じ屋根の上で、写真を撮った仲間だから。

来年は、10月22日（金）　綿業会館で5時からだそうだ、

36年の皆さん一度は顔出す価値ありです。

2010年10月29日　日本綿業倶楽部にて

◎集合写真

後列　名和　高木（啓）　井上　稲治　澤井　内田　吉村　齊藤　丸尾

中列　小松　富場　中村　米田　岡島　三浦　田村　濱田　山口　村松

前列　横山　田中　田上　高木（亨）　川西　片岡　小寺

追想：故中野正さん

田　中　稔　昭

今年の夏も炎暑であった。７月に入ると早くも連日うだる暑さが続き、中野さんの体に障るのではないかと案じていた矢先の訃報である。悲しくて残念でならない。遠方を口実にお見舞いに参ずるのを怠っていた自分が恥ずかしく、悔やまれる。この数年、呼吸器疾患に苦しまれ、肺炎、気管支炎、肺気腫で入退院を繰り返された。具合が悪くなってもぎりぎりまで我慢されるため救急車での入院も度々であった。辛い闘病であったと想像するが退院の後「ちょっと病院に入っていた」と明るく、心配する周囲に気遣う中野さんであった。最後になった入院先では、奥様とお嬢様が泊り込みで看病されたが、其の甲斐も無く息を引き取られた。旅立ちは安らかであったと奥様より伺い安堵した。ご冥福をお祈りするばかりである。

畏怖を感じさせず、畏敬してやまない中野さんには40年にわたり公私にご指導頂いた。私には慈父、厳父、賢兄であった。部下を持つ立場に立ってからは「清く、正しく」を心がけたが中野さんの足下にも及ばない。出自、学歴にはこだわらず、権威を嵩にかかる人、権威に盲従する人を排したが、ご自身地位が上がっても「毀誉褒貶」は意に介さず、威張ることは無く、信ずるところを走り続けた「無愛想の清々しさ」を持った大人であった。スタンドプレーを嫌い、地道に取引先の中小企業の育成に力を注ぎ其の成果を誇りにされた。専務退任後、中野さんの人柄、見識、能力が評価され、フジシールの社長に招聘された。期待に応え同社の株式上場を果し、更にグローバル企業への発展の足場固めを終えられ、悠々自適の生活に入られた。

仕事一筋の中野さんであったが、忙中閑、クラシック音楽を楽しまれた。最高の演奏を上質の音質で楽しむのを喜びとされ、それの入手にはお金を惜しまない。其の造詣の深さと碩学には驚かされたものである。地域統括役員として香港に駐在された時、狭いアパートでご自慢のステレオでクラシックを楽しまれていた。もっと広い部屋で大音量で聴くのが醍醐味と思うが我慢されていたのであろう。いかにも中野さんらしい。５年前、私が腎臓癌で全摘手術を受けることをお話すると、「ベッドでクラシック音楽を聴くとよい。特にベートベンは元気をくれる」と励まして頂いた。ほどなく中野さんより激励の手紙とともに過分のお見舞いが届いた。それは家内への気遣いと労わりに充ち「退院したら奥さんをフランス料理に連れて行ってあげてください」とあった。全身が熱くなり字が霞んでしまったことを思い出す。

中野さんとの出会いは40年前、一時帰国の際お目にかかったのが最初である。貿易実務の経験は無く英語も堪能でなかった中野さんはロスアンジェルスに駐在された。合成樹脂の商いは単価が安く相当の物流を確保しないと採算に乗らない。異国の地で大変なご苦労であったろうと思う。優れた先見性でパッケージの分野に活路を見出し、基盤固めに成功しておられた。論理的思考とBUSINESS　PHILOSOPHYを確立されていたため、短期間で英語力は向上、弁護士とも十分議論できるレベルに達していた。畑違いの分野だが日東紡績に、公害関連の技術に優れていたMENARDI社を紹介し、ガラスCLOTHの処理に関する技術援助契約締結に導いた。日東紡績は長年培ってきた織布技術をガラス繊維に応用し、福島に最新鋭の織布工場を新設、コンピューターには不可欠の銅張積層板用ガラスCLOTHの量産に成功していた。アメリカでは既にIBMなどを中心にコンピューター産業が育ち世界を席巻していたが、それを支えたのが半導体とそれを搭載する銅張積層板である。当時はどの業界もアメリカが世界のナンバーワンの時代であった。アメリカの積層板メーカーにガラスCLOTHを納入することが、品質が世界水準であることを立証する近道であった。日東紡績は対米輸出を中野さんに託したのである。日本側の担当であった私には輸出実務の経験は無く、中野さんも戸惑われたと思う。駐在当初のご自分と小生がダブったのではなかろうか。マーケティングの手法を実践で丁寧にご指導頂いた。契約遵守の大切さも教わった。この成功は後に銅張積層板用の電解銅箔の商権獲得に繋がり、電子工業材料商いとして東京合成樹脂第三部の柱の一つに育って

いった。後年、中野さんはロスアンゼルス時代を回顧し、周囲に「田中君には世話になった」と仰って頂き恐縮したが、仕事の成功は部下のお陰と部下に花を持たせ、失敗は自分のせいにされるのが、中野さんの流儀であった。

20年後の平成6年7月、アジア・大洋州統括役員として香港に駐在されていた中野さんに、シンガポール支店長として赤字脱却を図る大役を授かった。人事処遇で退職を決意していた私に捲土重来の機会を与えて頂いたのである。赴任して驚いた。ライバルと思っていたトーメンとは業容、人的配置どれをみても到底及ばず、背中さえ見えぬ状態であった。最も深刻な問題はN／Sの勤務態度、言動で彼らを排除するのが急務と結論つけた。進出していた日本企業の間にはこの種問題を抱えていた会社もあったが、荒療治には慎重であった。私は勤務態度の悪い6人を一気に解雇しない限り社内秩序の回復はないと思い決断した。中野さんに其の決意を報告すると「途中で退却は出来ない。有能な弁護士を起用せよ」と理解を得た後、短く忠告された。解雇に踏み切ると、彼らが所属する組合の意を受けた労働省が解雇撤回を求めてきた。労働省は組合寄りのスタンスであったが、起用した弁護士オンさんの活躍で次第に風向きは変ってきた。一ヶ月後、解雇が認められ想定内の金銭的解決で決着がついた。これを機に日本人駐在も自信を取り戻し、N／Sにも緊張感を持たせることになり赤字脱却に時間はかからなかった。誰よりも中野さんに喜んで頂いた。この体験は私に大きな自信を与えたが、中野さんの救いが無ければ、捲土重来はないまま平凡な人生で終わっていた。弁護士のオンさんとは今も親交が続いている。信頼して頂き、任せて頂いた中野さんに感謝あるのみである。

毎年8月の第一土曜日に大阪合成樹脂第二部OB・OG会、別名［中野さんを囲む会］が開催される。中野さんと苦楽を共にした人、薫陶を受けた人の集まりである。同部に在籍経歴の無い私だが、第一回開催の時、大淀製紙に出向中で在阪が幸いし、駆けつけることが出来た。この会への出席を中野さんも大変楽しみにされ、毎回元気な姿があったが、二年前、体調思わしくなく欠席された。中野さんにとり、其の前年の第7回が最後の会となった。近況を報告しあい、昔話に花が咲き、翌年の再会を約す楽しい会であった。もう中野さんにお目にかかれない。畏敬してやまず、感謝の念を込め、改めてご冥福をお祈りする。

合　掌

【編集後記】

早くも師走である。 今年は長い長い夏日を乗り越えたと思ったら、短い秋から一足飛びに冬が到来した感じだ。 そしてあと旬日で正月を迎える。
まさに烏兎匆々を実感する。

2006年にスタートした新生“東京社友会”も、年が明けて6年目に入る。
社友会の役員・世話人一同、揃って5年の歳月を重ねて来たことになる。

7月の総会で会長を勇退された丸山修作さんは、懇親会の部で、ステージに立たれ、バンドを従え、その人生の思いを込めて『My Way』を歌い上げました。
お疲れ様でした、そして、今後とも御健勝の日々をお過ごし下さい。

この『会報』も年二回発行で今回でNo 9を数える。 ベートーベンの交響曲はNo 9で終わりだが、会報はNo.9で終わりと言う訳には行かない。

毎回、原稿集めには苦労するが、今回は平岡昭三さん、松村昭太郎さんの二人の大先輩にご寄稿、ご協力頂いた。

大阪社友会・丸尾嘉重さんよりも『奈良便り』の玉稿を頂いた。 会報でも東西交流が 端緒についたことになる。

今後とも会員の皆様の『会報』へのCONTRIBUTIONを鶴首しています。

来る2011年が皆様にとって無事平穏で恙無いことをお祈りして、

（　長谷川　洋　）

ニチメン東京社友会

〒107－8655　東京都港区赤坂2－14－7
双日㈱内　東館17 F

発　行　人　；倉又　則夫　代表世話人
編集責任者　；長谷川　洋　世話人
アドバイザリー・スタッフ；高木　亨一　世話人
倉持　次雄　世話人
印　刷　所　；㈲　関　内　印　刷